

わきみずてつごろう  
**脇水鐵五郎が西欧留学中に採集した岩石標本**

田 口 聡 史

ニュースレター「瀬8号」で紹介した風景地質学者の脇水鐵五郎ですが、大正元年から2年間西欧および北米に留学したことが知られています。その目的は、理論土壌学に関する新しい知識を得るためでした。なかでも、ハンガリーのブタベストには約8ヶ月半も下宿し、大学やギムナジウムを参観、地質調査所のトライツ氏に土壌学を学びました。今回は、共同で資料の調査を行っている当館ボランティア福島美和さんのレポートから、海外での脇水鐵五郎の様子を紹介します。国士舘大学文学部野口泰生教授には、調査の機会を与えていただき、数々のご教示を頂きましたことに厚く御礼申し上げます。

岩石標本は、「一九一三 一九一四年採集外国岩石鉱物」「同上」と表示される標本棚の計4棚に収蔵されていました。標本は全部で49点（3点はラベルのみ）、内訳は岩石標本（37点）・化石標本（2点）・土壌標本（7点）です。主にドイツ語で記述された資料名や地域、採集日に注目すると留学中の行程がわかります。最も古い岩石標本は、1912（大正元）年9月の香港に始まり、ドイツ・イタリア・スイスなど計6カ国を数え、最も新しい1914（大正3）年5月にわたります。採集した年ごとに岩石標本をみると、1912年9月（1点）、



ベスビオ火山に関連した標本類

11月（3点）、1913年1月（1点）、4月（15点）、5月（3点）、8月（8点）、9月（7点）、11月（3点）、1914年5月（3点）が明らかになりました。

注目される標本は、スイス「ツェルマット」の蛇紋岩・絹雲母片岩などの結晶片岩・ザクロ石を含む片麻岩、イタリア「ベスビオ火山」の安山岩質溶岩・大正2年4月に脇水鐵五郎が登山した際に購入した火山灰標本（長さ16cm・直径1.2cmのガラス製管ビン、噴火日ごとに色や性質が異なる）・ポンペイの町を覆った軽石などの火山噴出物、ドイツ「バイエルン」の石膏の結晶、「ヘッセン」の赤色土壌、グリーンランドのリンカイト、ハワイ「オアフ島」の赤色土壌などがあります。

ラベルの種類は45点が東京帝国大学農科大学の「Geological Laboratory, College of Agriculture, Tokyo Imperial University」を使用しています。脇水鐵五郎が採集したものには「T.W.」と記名があり、今回の調査では24点に確認できました。また「T.H.」と記名がある1913年のラベルが存在しますが、これは脇水鐵五郎の1年後輩にあたる比企忠（のちに京都帝国大学工学部教授）が、同様に大正2年から欧米に留学した際のものと思われます。2人の留学期間と国が重複しているため、海外の地で交流をもった可能性が考えられます。

（たぐち さとし・担当課長）



西欧留学中の岩石標本を調査記録する